

I. オペレッタとは

話し言葉による対話、歌、舞踊を伴った軽いオペラ。この形式は 19 世紀後半と 20 世紀初頭にヨーロッパやアメリカ合衆国で流行した。17、18 世紀において「オペレッタ」という語は、一般的にオペラより短いもの、あるいは大掛かりでないもの、例えばヴォードヴィル、ジグ・シュピール、バラッド・オペラといった舞台作品の一種を指して使われた。英語圏の国々ではオペレッタがミュージカルに発展した。

(「ニューグローヴ世界音楽大事典」より)

はじめに

オペレッタは 1850 年代にフランスのオペラ・コミックから起こった。元来本質的に新しいものではなく、オベールやドニゼッティといった作曲家の最も軽いオペラにその起源を見ることができる。本格的な内容の作品を取り上げていこうというオペラ・コミック座の方針は、オペラ・コミックとヴォードヴィルとの間に溝を作った。その溝を埋めたのがオペレッタであった。オッフェンバックのオペラ・ブフが独自の新しい娯楽性の強い舞台作品として成功し、大衆の喝采を獲得したことで、オペレッタは独立した一分野として確立した。その結果、オッフェンバックの成功を超えようとする外国での試みが行われるようになり、それが他の国でもオペレッタの楽派の発生を促し、このジャンルを国際的なものにした。オペレッタにはそれ以外にも明らかな先例があり、軽いオペラから滑稽な歌曲を散在させた短い劇まで幅広い上演を行う劇場のレパートリーとしてすぐに適合した。

(「ニューグローヴ世界音楽大事典」より)

オペレッタの生まれた時代 ーフランス・第二帝政時代ー

ナポレオンの末裔ルイが庶民に迎えられ国王となり、第二帝政と呼ばれるフランスの歴史でも最も華やかな栄光の時代(1848-70)が始まった。血のフランス革命も終わり産業革命で庶民の力が沸き起こり国家は繁栄し、そのエネルギーは革命や戦争に向かうことなく国内に充満し、デカダンの花を咲かせる。娼婦、金権結婚、黄金万能と三つの悪の華が第二帝政の人工庭園に毒々しく咲き誇った。ボードレールが「悪の華」をデュマ・フィスが「椿姫」を書いたのもその頃だ。

そんな時代の真只中にオッフェンバックのオペレッタが生まれた。シェイクスピアは「芝居は社会を映す鏡」といったが、こうした世の中を鏡のように映し出し、面白おかしくしかも鋭く諷刺したのがオッフェンバックのオペレッタだった。
(「ウィンナ・オペレッタへの招待」より)



↑ オッフェンバック《パリの生活》(1866)の上演を
笑う観客

← 1855年のパリ万国博覧会の様子

オッフェンバックと ブッフ・パリジャン座

自分の作品を理想的に上演するためにヴァーグナーがバイロイトに祝祭劇場を建てたように、オッフェンバックは1855年にパリのシャンゼリゼ通りに「ブッフ・パリジャン座」を建設した。このころから、アーレヴィイやメイヤック、クレミューといった優れた作詞家・脚本家たちと共同で仕事をするようになり、《天国と地獄》(地獄のオルフェ)を発表したが、ジャンンという批評家が「神話を冒瀆するもの」と酷評したことがかえってパリ中の話題を呼び、228回ものロングランを続けることになった。この作品の第二幕の中で、天国と地獄の神々が入り乱れて繰り広げる、狂宴の乱痴気騒ぎの舞踏会の場面でのフレンチカンカンのギャロップが大当たりし、あっという間にこのカンカン踊りがパリの名物となった。

(「ウィンナ・オペレッタの世界」より)



《地獄のオルフェ》
ジュール・シェレによるポスター
1874年の改訂4幕稿のためのもの

パリからウィーンへ ーウィーン・オペレッタの系譜ー

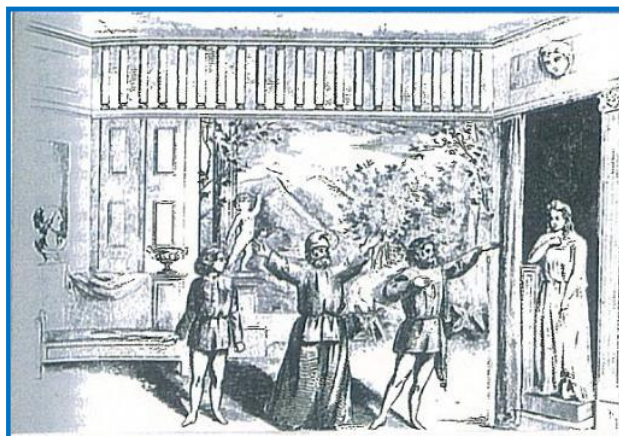
オッフェンバックのオペレッタはウィーンにも影響を及ぼしました。もっとも、ウィーンにおける当初のオッフェンバックのオペレッタの上演は「海賊版」によるものといわれています。しかし、1861年1月にオッフェンバック自身のウィーン訪問が実現、同年六月にはブッフ・パリジャン座のウィーンでの客演が行われるなど、ウィーンはオッフェンバックのオペレッタの第二の中心地となったわけです。

これに刺激されてウィーン風のオペレッタを発表していったのがズッペですが、ワルツ王シュトラウス2世もワルツの作曲からオペレッタの作曲へと手を広げていきました。その他、この時代のオペレッタ作曲家としてはミレカー、ツェラー、ツィーラー、『オペラ舞踏会』を作曲したホイベルガーなどの名前を挙げることが出来るでしょう。こうした作曲家たちの活動した時代を、オペレッタの歴史の上では「ウィーン・オペレッタの黄金時代」と称しています。

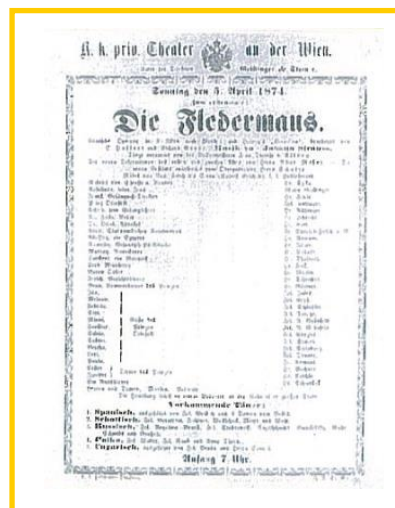
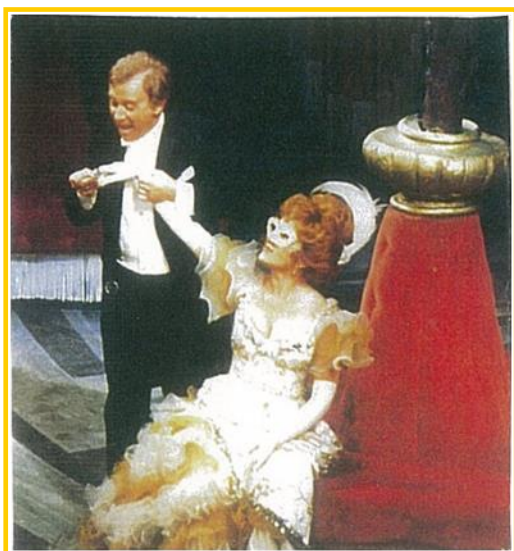
1905年に初演されたレハールの『メリー・ウィドー(陽気な未亡人)』は、新しい時代の始まりを示す画期的な作品となりました。オペレッタの歴史の上では、これ以降を「ウィーン・オペレッタの白銀時代」と称しています。

(「ウィーン・オペレッタ探訪」より)

ズッペ 《美しきガラテア》(1865)



ヨハン・シュトラウスⅡ世 《こうもり》(1874)



初演時のプログラム

レハール 《メリー・ウイドウ》 (1905)



初演が行われたアン・デア・ウィーン劇場

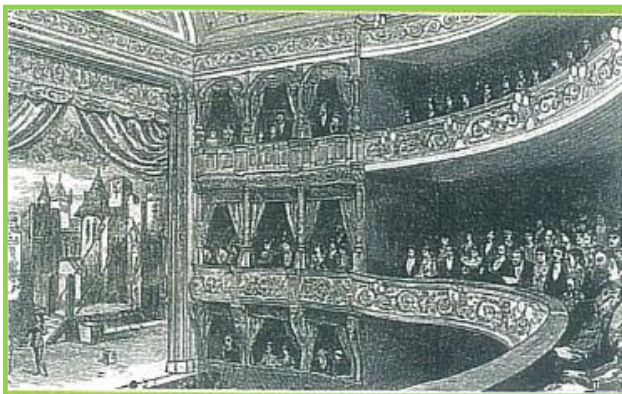
← ハンナ役のミツィ・ギュンターと
ダニロ役のルイス・トロイマン(1906)

イギリス

ロンドンでは、1860年代に初期のウィーンがそうであったように、オッフェンバックのオペレッタが頻繁に上演された。イギリスの作曲家も徐々にそれに続いたが、サリヴァンが作曲した〈コックスとボックス〉(1866)のように、オッフェンバックの〈2人の盲人〉(1855)の影響を直接受けたものもあった。フランスやウィーンの比較的大規模なオペレッタがロンドンで受け入れられる一方、フレデリック・クレイの〈トートー姫〉(1876)など、幾つかの作品が地元の作曲家によって作られた。1871年から96年までの間サリヴァンがG.S.ギルバートと合作した一連の喜歌劇は、ほかのすべてのイギリスのオペレッタを凌駕するものであった。

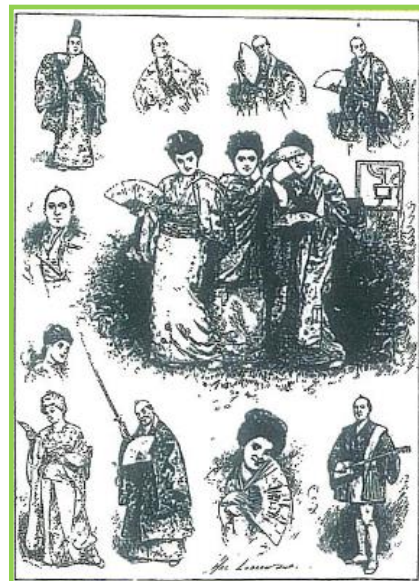
(「ニューグローヴ世界音楽大事典」より)

サリバン 《ミカド》 (1885)



1881年に10月10日に開幕したサヴォイ劇場

初演の舞台の様子 →



Strauss, Johann (ii)

こうもり Die Fledermaus

・・・正にオペレッタの王様。楽しいワルツに誰もが浮かれる名曲で、内容が大晦日の晩の話であることから、ウィーン、ミュンヘン他のドイツ語圏では年末の恒例の出し物になっている。

[オペレッタ名曲百科 より]

作曲 1873年
初演 1874年4月5日 アン・デア・ウィーン劇場
原作 アンリ・メイヤック、リウドウィク・アレヴィの喜劇「レヴェイヨン」
台本 リヒャルト・ジュネ、カール・ハフナー
構成 3幕

〈主な登場人物〉

ガブリエル・フォン・アイゼンシュタイン (T) 裕福な銀行家

ロザリンデ (S) アイゼンシュタインの妻

アデーレ (S) 一家の小間使い、女優志願

フランク (Br) 刑務所長

オルロフスキー公爵 (T/Ms) ロシアの若い貴族

[一冊でわかるオペラガイド126選 より]



初演時のポスター

〈あらすじ〉

ファルケ博士の復讐の企てとも知らずに、留置場行きの前にオルロフスキー公爵主催の夜会へ出かけたアイゼンシュタイン。女優になりすました小間使いアデーレ、仮面をつけた妻ロザリンデを巻き込んだの騒動もすべてシャンパンの泡のせい。

[一冊でわかるオペラガイド126選 より]

Lehar, Franz

メリー・ウィドウ Die lustige Witwe

・・・巨星たちが去った後、しばらく沈滞していたウィーン・オペレッタ界に活を入れ、再び昔日をしのぐ「白銀時代」の隆盛をもたらすきっかけを作ったのが「メリー・ウィドウ」の英語名で世界的に知られるこのレハールの「陽気な未亡人」だった。[最新名曲解説事典 v.20 より]

作曲 1905年
初演 1905年12月28日 アン・デア・ウィーン劇場
原作 アンリ・メイヤックの「大使館随員」
台本 ヴィクトール・レオン、レオ・シュタイン
構成 3幕

＜主な登場人物＞

ミルコ・ツェータ男爵 (Br) ポンテヴェドロ公使
ヴァランシェンヌ (S) ミルコ・ツェータ男爵の妻
ダニロ・ダニロヴィッチ伯爵 (T/Br) 公使館書記官
ハンナ・グラヴァリ (S) 富豪の未亡人

[一冊でわかるオペラガイド126選 より]



＜あらすじ＞

若くして巨額の遺産を相続した美貌の未亡人ハンナと、ポンテヴェドロ公使館の書記官ダニロ伯爵の恋のさや当て物語。かつての恋人同士が意地を張り合い、結ばれるまで。ツェータ男爵の妻、ヴァランシェンヌの浮気騒動もからまる。 [一冊でわかるオペラガイド126選 より]

II. 作曲家紹介(地域別・年代順)

紹介記事はニューグローブ世界音楽大事典Webを引用しています。

<フランス>

オッフェンバック Jacques Offenbach (1819–1880)

ドイツ系のフランスの作曲家。ヨハン・シュトラウスとともに19世紀のポピュラー音楽界の双璧をなし、非常に陽気な美しい旋律にあふれた音楽を書いた。最も重要な功績はオペレッタの分野にある。彼の作品はフランス内外で爆発的な成功を収め、シュトラウス、サリヴェン、レハールらの後継者を生み、オペレッタは国際的に確立された一つのジャンルとなった。

ビゼー Georges Bizet (1838–1875)

1856年にオッフェンバックが企画したコンクールで台本と指定されたのが〈ミラクル博士〉であり、審査の結果、ビゼーとルコックの2人が賞を分け合うことになった。ドニゼッティやオッフェンバックの作品からアイディアを借りてきたこの作品には、パロディやスコアの書き方、喜劇的な性格描写などの点で巧みな表現が数多く見られる。

オドラン Edmond Audran (1840–1901)

フランスの作曲家。ブフ・パリジャンの監督カンタンに招かれてパリに赴き、同地では〈マスコット〉(1880)などによってルコックに比肩する作曲家としての地位を確立するとともに、国際的な名声をも獲得する。80年代を通して彼はフランスのオペレッタ界に君臨した。

シャブリエ Emmanuel Chabrier (1841–1894)

フランスの作曲家、ピアニスト。生来のコミックなものに対する感覚は、次第に音楽としての形をとり始め、〈星 エトワール〉(1877)と〈教育不足〉(1879)という2つの肩の凝らない劇作品となって現れた。どちらの作品にも、滑稽さ、快活さ、自然な旋律、優しさが、不協和音の自由な使用と結びついている。〈いやいやながらの王様〉は1887年のオペラ・コミック座初演で大成功を収め、国外、特にドイツにおいてシャブリエの名を高めた。

プランケット Robert Planquette (1848–1903)

フランスの軽音楽作曲家。カフェ・コンセールのピアニストをしていたころ、オペレッタ〈コルヌヴィルの鐘〉を作曲する好機をつかんだ。この作品は、1877年4月19日にフォリ・ドラマティック座で初演されて以来400回以上連続公演され、その後の10年間に上演回数は1000回を数え、作曲者に名声をもたらした。この鐘の伝説は非常に人気を集め、国外でも繰り返し上演されて、とりわけロンドンで好評を博した。彼はまた、ロンドンで上演するためにワシントン・アーヴィングの小説を基にした〈リップ・ヴァン・ウィンクル〉を作曲し、これは彼の2番めに有名な作品となった。

アーン Reynaldo Hahn (1875–1947)

ベネズエラ生まれのフランスの作曲家、指揮者。彼の本領が最もよく発揮されているのはオペレッタである。アーンは旋律作りの新鮮さや絶妙な和声、言葉の旋律へのはめ込みの才、形式などにおいて、メサジェにも比肩しうるものを持っていた。代表作は〈シブレット〉であり、1923年に初演され、大成功を収めた。この作品は、その後も何度となく上演されている。

＜ドイツ、オーストリア＞

ズッペ Franz von Suppe (1819–1895)

ベルギー系オーストリアの作曲家、指揮者。ウィーンで最初の音楽喜劇作曲家に数えられる。その作品は現在でも十分上演可能であり、序曲は特に人気がある。後半生には、当時すっかりウィーンに溶け込んでいたオッフエンバックの作品に続いて、正統的なウィーン風オペレッタを作曲し、その第一人者となった。〈美しきガラテイア〉(1865)から〈ボッカッチョ〉(1879)に至る一連のオペレッタのなかで、彼の真価が最も発揮され、その特質が際立っている。

ヨハン・シュトラウス II世 Johann Strauss (ii) (1825–1899)

ウィーンの作曲家、指揮者、ヴァイオリニスト。ウィーンでオッフエンバックの人气が急速に高まり、シュトラウスも舞台作品を作曲するよう求められた。〈こうもり〉ではフランス風（オッフエンバック風）の機知と風刺を、ウィーン風のユーモアと甘い感傷に取り替えてはいるが、その目くるめく華麗さ、豊麗な旋律、歯切れのよいリズムによって、この作品はウィーンのエペレッタのなかでも傑作の一つに数えられる。

ミレッカー Carl Millöcker (1842–1899)

オーストリアの作曲家。ズッペの推薦により、1864年にグラーツのタリーア劇場の指揮者に就任する。その後、ブダペストのドイツ劇場やアン・デア・ウィーン劇場での指揮者の職務のかたわら、歌曲や多くの短い劇作品のための付随音楽を作曲した。〈乞食学生〉(1882)で大成功を収め、83年以後は指揮者の職を辞して作曲に専念する。1880年代の成功により、ヨハン・シュトラウスやズッペと並ぶ当時のウィーン・オペレッタを代表する地位を確立した。

ツェラー Carl Zeller (1842–1898)

オーストリアの作曲家。ウィーン大学で法律を学ぶと同時に、ジモン・ゼヒターに作曲を師事した。彼の作品には、歌曲や合唱曲が含まれる。最大の成功作はオペレッタ〈小鳥売り〉(1891)で、90年代におけるウィーン・オペレッタの再興をもたらした。創意に富んだ旋律の表現、声と重唱の見事な取り扱いなどで、オペレッタの古典の一つとして残っている。

ホイベルガー Richard Heuberger (1850–1914)

オーストリアの批評家、作曲家、指揮者。オペラやオペレッタ、および合唱曲や管弦楽曲によって、当時かなりの人気を博した。今日彼の名は、主にオペレッタ〈オペラ舞踏会〉の作曲家として記憶されている。この作品は1898年にウィーンのアン・デア・ウィーン劇場で初演され、後にアメリカ合衆国を含む諸外国でも上演された。今日でも、ドイツ語による軽歌劇の代表作として、しばしば舞台化されている。

ベルター Heinrich Berté (1857–1924)

オーストリア-ハンガリーの作曲家。2作目のバレエの成功後、舞台のための作品を書き続け、少なくとも6つのバレエと12のエペレッタを制作した。最も成功した作品は、シュューベルトの生涯を伝える脚本に基づいたオペレッタ〈三人娘の家〉(1916)で、ここではシュューベルトの旋律が数多く用いられた。この作品は当時の成功したオペレッタの一つであり、ニューヨークではロンバークの編曲による〈花盛り〉として、またロンドンではクラットサム編曲による〈ライラックの時〉として上演され、国外でも国内と同じように高い人気を得た。

リンケ Paul Lincke (1866–1946)

ドイツの作曲家。1893年から97年までベルリン最大のバラエティー劇場アポロで指揮者と専属作曲家を務める。その後、オペレッタ〈ルナ夫人〉の成功と、同作品を自分のアポロ出版より出版したことで、名声と財産を築いた。マーチ・ソングやワルツ、あるいは大衆的な作品により、リンケの名は、オッフエンバックがパリの、ヨハン・シュトラウスがウィーンの象徴であったと同様、ベルリンの象徴となった。

オスカル・シュトラウス Oscar Straus (1870-1954)

オーストリアの作曲家、指揮者。ヨハン・シュトラウスから、地方の劇場で実地経験を積むように勧められ、1893年から99年まで、マインツ、ハンブルクなどで指揮者を務める。同じ頃、舞台作品や多くのサロン音楽の作曲者としても活躍した。ベルリンでピアニスト兼作曲家として成功を収めた後、ウィーンにおいて〈ワルツの夢〉など一連のオペレッタの作曲に着手する。この曲はレハールの〈メリー・ウィドー〉と人気を二分し、シュトラウスに初めて国際的な成功をもたらした。

レハール Franz Lehar (1870-1948)

ハンガリー生まれのオーストリアの作曲家、指揮者。20世紀を代表するオペレッタ作曲家であり、オペレッタというジャンルを国際的に通用する娯楽形態としてよみがえらせるうえで大いに貢献した。オペレッタ全般の音楽的水準が急速に低下しつつあった時代にあつて、レハールは最後の作品〈ジュディッタ〉をウィーン国立歌劇場のために書くという栄誉を手にした。レハールのオペレッタのなかで最も成功を収めた〈メリー・ウィドー〉は、オペレッタ劇場のみならずオペラ劇場でも上演される評価の確立した作品となり、彼はオフエンバック、ヨハン・シュトラウスとともに、今なお最も人気のある軽音楽作曲家の一人となっている。

ファル Leo Fall (1873-1925)

オーストリアの作曲家。1895年にハンブルクでオペレッタ指揮者となり、そこで舞台作品のための音楽を書く。1905年に最初のオペレッタ〈反逆者〉を書き、06年には指揮者をやめてウィーンに落ち着いている。その後、〈ドルのお姫様〉などの成功により、ファルはウィーンのエペレッタ作曲家のなかでレハール、オスカル・シュトラウスと並ぶ存在となり、国際的な名声も確立した。

カールマン Emmerich Kalman (1882-1953)

ハンガリーの作曲家。カールマンはオーストリアがナチス・ドイツに併合されるまでウィーンに住んでおり、この時期に最も多くの作品が生まれている。中でもウィーン風のオペレッタは音楽的に質が高いばかりでなく、台本の選択も慎重になされていた。カールマンの曲は、ウィーンのエペレッタ様式の最良の特徴とハンガリー的要素とを巧みに組み合わせている。また、〈シカゴの伯爵夫人〉(1928)ではジャズの要素を試みている。彼のオペレッタの形式に関する主な貢献は、「ダンス・オペレッタ」という不適切な部分を割愛し、その代わりに合唱により重要な位置を与えたことにある。

ベナツキー Ralph Benatzky (1884-1957)

オーストリア-ドイツの作曲家。ミュンヘンで作詞家および指揮者として音楽の道の第一歩を踏み出した。その後、一時ウィーンのキャバレーで監督として働き、歌曲の作詞・作曲をしている。ベルリンに移る前に、幾つかのエペレッタを作曲している。ベルリンでは、〈白馬亭にて〉(1930)など、レビュー・スタイルのエペレッタ音楽に専念した。舞台音楽のほかには多くの映画音楽も手掛け、5000曲以上の歌曲を書いたと推定される。

アーブラハム Paul Abraham (1892-1960)

ハンガリーの作曲家。1910年から16年までブダペスト王立音楽院で学び、本格的な管弦楽や室内楽の作曲家として出発した。27年にはブダペスト・オペレッタ劇場の指揮者となり、多数のエペレッタの作曲を依頼される。またドイツに招かれ、初めての完全なオペレッタ〈ヴィクトリアと彼女の軽騎兵〉(1930)で大成功を収めたが、それはジャズや当時の舞踊形式を使用していた。

ドスタル Nico Dostal (1895-1981)

オーストリアの作曲家。クロスターノイブルクにあるウィーン音楽アカデミーの教会音楽科で学ぶ。その後インスブルック、ザルツブルク、ベルリンで劇場作曲家、編曲家として働いていたが、1933年に自作のエペレッタ〈君子蘭〉で初めて成功を収める。

<イタリア>

マスカーニ Pietro Mascagni (1863–1945)

イタリアの作曲家、指揮者。
イタリアはドイツやフランスのようにオペラが庶民から乖離していくことがなかったために、一番オペレッタが生れにくい土地柄だった。オッフェンバックのオペレッタもJ・シュトラウス2世の《蝙蝠》もイタリアではさして歓迎されなかった。それはイタリア人には異質な文化だったのである。ところがレハールの《メリー・ウイドウ》が1907年にイタリア初演されるや、イタリアにオペレッタ・ブームが起きるのだ。でもイタリアにはオペレッタの作曲家がいない。そこで、プッチーニ、マスカーニ、レオンカヴァッロといった本格的なオペラ作曲家にオペレッタの作曲依頼がくるようになった。（「オペレッタ名曲百科」より）

<イギリス>

サリバン Arthur Sullivan (1842–1900)

イギリスの作曲家、指揮者。生涯を通じ、作曲家としてイギリスにおける指導的立場にあった。喜歌劇、特にW.S.ギルバートの台本による作品はイギリス独特のオペレッタ様式を代表するものであり、永続的かつまれに見る高い名声を確立した。サリヴァンはこれらの作品により、イギリスで最も人気のある作曲家の一人と見なされている。